



背景

昭和51年（1976）9月、台風17号は小豆島に年間降雨量に匹敵する1,400mmもの豪雨をもたらしました。香川県全域の被害は、死者50名、重軽傷者127名、家屋の全壊274戸、半壊317戸、床上浸水4,477戸、床下浸水15,224戸にのぼりました。この話は、小豆島の小豆島町の小学校5年生の女子が体験した3日間の台風記録です。子どもの視点で、台風の怖さと助かった時の感動が記されています。

アクセス 小豆島町役場

- ・小豆島町役場内海岸舎
- ・小豆島町内海
- ・緯度経度 北緯34度28分42秒，東経134度18分54秒



昭和五十一年（一九七六）台風一七号が来たときの話です。

九月一日の朝、雨の中、隣のおじさんが大声で「上流の公民館が流れてくるぞーっ！」とみんなに知らせにきました。私とお姉さんは、何も持たず、犬二匹を連れて、急いで避難しました。お母さんはお金を持つて後から逃げて来ました。お父さんは消防へ行っていました。私たちは黒島のおばちゃんおばちゃんの所へ避難をするのです。停電なので真っ暗な中を、雷は鳴るし雨は降るし、とっても怖かったです。私とお姉さんはびっちゃんちゃんになりながら、犬を必死に抱いて逃げました。何かにつまずいて転んだ私にお姉さんが「何しよん、早よ立ち、早よっ」ときつくいいました。お姉さんがあんなにきつく言ったことはあまりなかったので、私はびっくりしてすぐ立ち上がりました。

一二日朝、雨が小降りになったので、私とお姉さんとお父さんとで家へ大事な荷物を取りに帰りました。すると家の中は、水と土が膝の少し上まで来ていました。

夜、ごはんを食べた後、ローソクの下で、大人の人たちは死ぬことばかり言っていました。「もう最期やから賑やかにかにかんか」などと言っています。お姉さんは、「どうせ死ぬんやったら」と言つてよそ行きの服を着て寝ました。私は死にたくないと思いました。お父さんはお酒をたくさん飲んで、「どうせ死ぬんやたら、ぐっすり寝てなんにもわからずに死にたい、苦しみの中で死にたくない」と言っていました。そんな話が続いて、とうとう夜が明けました。

「うわっ、助かった！」誰もが言いました。太陽が光り「ああ助かったんやなあ」と思いました。家を流されたり、つぶされた人もいます。亡くなった人もいます。とても恐ろしい三日間でした。